

滑川出身の詩人 高島 高 たかし

知られざる生涯に光

故郷の自然を歌った「北方の詩」で中央文壇に華々しく登場した滑川市出身の詩人、高島高。没後66年が過ぎ、その存在を知る人は少なくなりつつある。同郷のグラフィックデザイナー、伊勢功治さん(64)＝東京、顔写真＝は高島高の知られざる一生を明らかにした著書を刊行し、富山の学術文化の振興に貢献した人に贈られる翁久允賞を受賞した。「決して古びない高の詩の素晴らしさを知ってほしい」と話す。

(小山紀子)

同郷のグラフィックデザイナー

伊勢功治さん(東京) 刊行



「北方の詩人 高島高」

高島高(本名・高嶋高)は1910(明治43)年、現在の滑川市加島町に生まれた。旧制魚津中学校(現魚津高校)在学中に文学に目覚めたが、開業医だった父の希望で昭和医学専門学校(現昭和医科大学)に進み医師になる。

一方で文学の道も諦めず、若手詩人の登竜門だったコンクールで「北方の詩」が1等に入選。北川冬彦や萩原朔太郎ら著名な詩人に認められ、

詩誌「麵麴」の同人として活躍した。父の病気で帰郷し医院を継いだ後も、55年に44歳で亡くなるまで詩作に励んだ。

伊勢さんは、高が13歳で母を亡くしたことが創作のきっかけになったとみる。「母は傷みやぶれた手風琴です」という短い詩には「母を思う胸の痛み、切なさが表れている。喪失感と空虚感、孤独を知ることが高は詩人になったのではないか」と考察する。

学生時代の恋愛詩

著書は高の生涯を、作品を豊富に交えて紹介。特に東京で過ごした学生時代にスポットを当て、詩作の原点に迫った。

高が学生時代につづった詩には恋愛詩が多い。学友会誌に掲載された詩「冬の夜の海邊の家」には「惜みなく呪ひつくしてやるのだ。／魂をえぐって遠き人に去った／詐

繊細で情熱的な一面



大学を卒業し、詩人としてスタートを切った頃の高島高＝1936年ごろ

偽師の女よ!」という一節があり、女性への激しい感情をあらわにしている。伊勢さんは「高は北アルプスや海など、故郷の自然をうたった男性的詩人として知られてきたが、実は繊細で情熱的だったことが分かる」と言う。

弱者に寄り添う

高は同じ頃、著名な詩人や作家らと身近に接することで大きな刺激を受けた。沖繩出身で放浪生活を送っていた詩人の山之口獺や、プロレタリア作家の高見順らと親しく付き合う中で、弱者に寄り添う視線を持つようになった。

伊勢さんは戦前に盛んだったモダンリズム詩に興味を持ち、研究する中で高に興味を持った。高は母校・滑川市寺家小学校の校歌の作詞者で、実家から徒歩5分ほどのところに住んでいた。身近な詩人がどのような人生を送ったのか知りたくなり、資料を集め始めた。

詩集や寄稿作品に加え、幅広い交友関係がうかがえる1500通以上のはがきや書簡、新聞スクラップなどの膨大な資料を基に、10年以上かけて完成させた。「高を知る人は少なくなった。この本を機に、彼の詩の魅力を知ってほしい」。今後もライフワークとして調査、研究を続けていく。

「北方の詩人 高島高」は思潮社刊。四六判320頁、35520円。